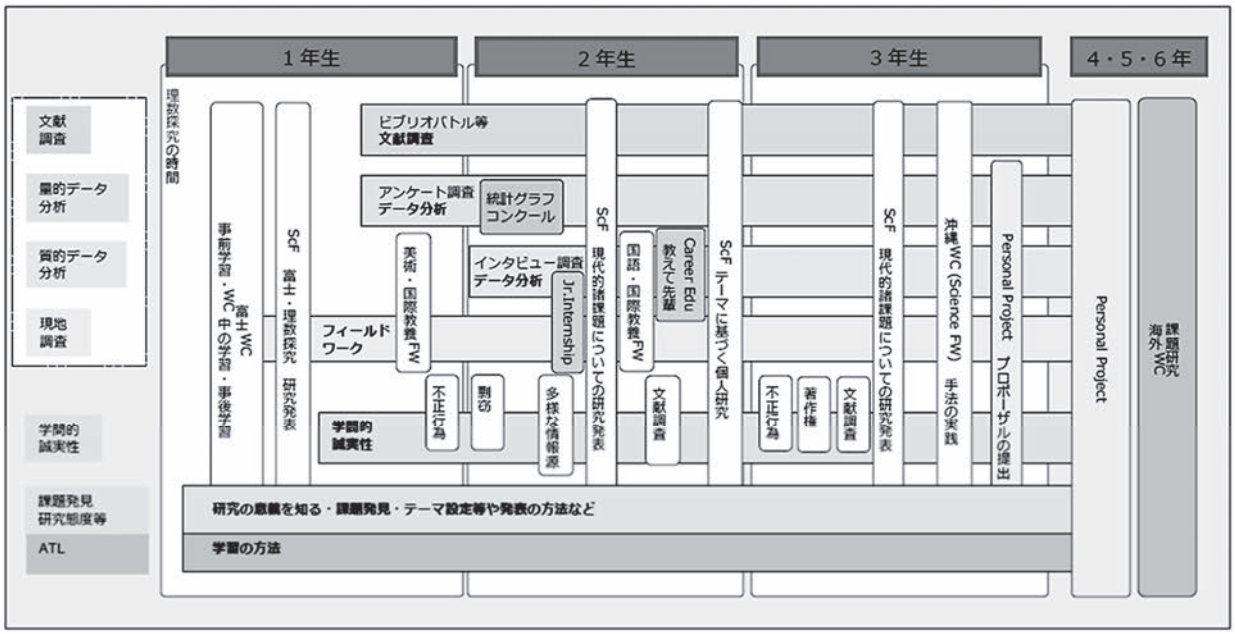
5　研究開発の実績

5.1 仮説Ⅰ　課題研究

5.1.0　概要

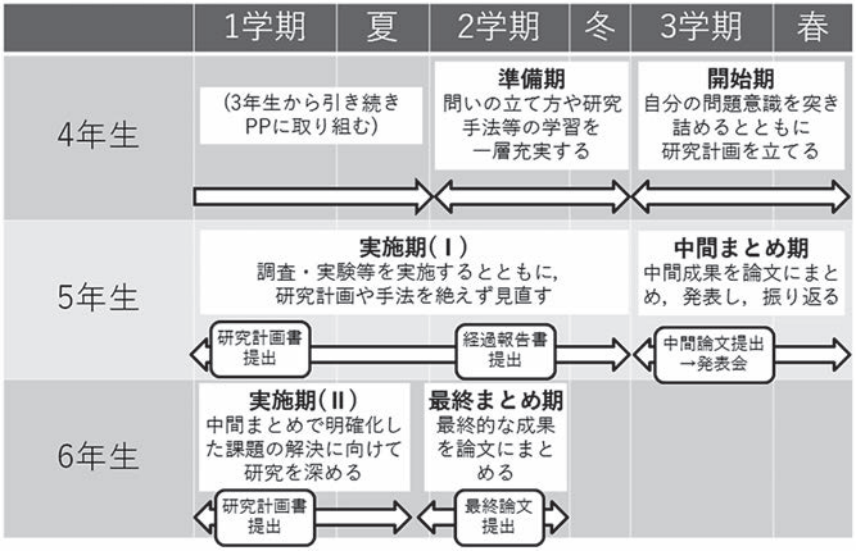
（１）後期課程課題研究について

本校は後期課程４年生から６年生まで各学年１単位で課題研究（総合的学習＜探究＞の時間）を実施している。ただし、この３年間は中等教育学校６年間の中に次図のように位置づけられている。



前期課程の３年間はいわば後期課程３年間で行う課題研究への基礎的な姿勢やスキルを養う期間であり、これがあるからこそ本校の後期課程では課題研究に主体的に取り組むことができると言ってよい。さらに後期課程では次のような流れで IB（国際バカロレア）の PP（パーソナルプロジェクト）から課題研究までを実施している。

４年生の２学期から６年生の２学期までを一続きの研究期間としてとらえ、全員が研究論文を２回提出する仕組みとなっている。指導体制は、原則教員が講座を担当する形であるが、講座内にはいろいろな研究テーマの生徒が集まっている。教員は「教える」ための指導者ではなく、「問いかけ」「共に検討する」ための助言者として存在する。



（２）ISS チャレンジについて

ISS チャレンジは、SGH 指定初年度から開催しており、2019 年度で５回目を迎えた（2014 年度は SSH のみで開催している。それを含めると５回目となる）。

校内課題研究コンペティションの形式をとることで、生徒の自律的な課題研究を

活性化するとともに、参加生徒の課題研究への人的・物的両面でのサポートを図ろうという本校の課題研究支援システムである。最終的に校内で優秀研究が表彰の対象になるとともに、学校外での研究発表会や国内・海外研修の参加者選考という意味合いも兼ねており、競争原理をもとに生徒課題研究を促進することをねらいとしている。生徒たちは５月にエントリーを表明し、自己評価・教員からの評価・外部評価の機会や口頭発表・ポスター発表の機会を経ながら、１月に論文とポスターを提出する。ISS チャレンジ内に２部門（SSH 部門と SGH 部門）を設け、各部門の運営・生徒指導のマネジメントは SSH 委員会・SGH 委員会が分担して行う。今年度は SGH 部門に 64 チームがエントリーし、途中 8 チームがリタイアしたが、56 チームが最後まで課題研究を完遂できた。

・ファイナリスト 4 チームはいずれも継続研究。最長は 4 年目（前期課程 1 年次から継続的にエントリーし、同じテーマで研究している）

・研究のプロセスにおけるルーブリック評価回数：４回（1 チームに対しのべ７人の教員が評価およびコメントする）（＊昨年度 4 回）

・外部評価会：2 回（＊昨年度 2 回。ただし今年度は 6 月に 1 回・10 月に 1 回とした。）

（３）研修・その他の支援的取組について

課題研究を進めるにあたっては、課題設定の支援や課題の理解の深化をねらいとして、ISS チャレンジ以外にも以下のような取り組みを行っている。それぞれのねらいと現段階で判明している効果（成果）を掲げておく。個々の取り組みの詳細については次項以降に述べる。

①外部評価会	ISS チャレンジに応募・参加している生徒に対して大学教員・本校卒業生同窓会が評価・助言を行う。 →研究初期のデザインの段階で大きな効果がある。
②課題研究支援セミナー	後期課程（高校生）の生徒を対象として、研究推進・情報収集のために大学教員をはじめとする外部有識者を招き講義を行う。 →生徒の希望に関わらず、教員側が設定する講座にも生徒が「新たな知見」を開く効果がある。
③Global Café	課題研究の推進のための情報収集や研究成果・研修成果の発表の場として開催。外部講師招聘型と生徒主催型とに分かれる。前期課程生徒を含め、全学年を参加対象とする。 →校内の生徒同士の情報共有の場、外部へのプレゼンの訓練の場となる。
④国内研修・国内交流	国内の他校との交流・課題研究のためのフィールドワーク・課題研究を深化させるためのワークショップなど。 →他校の同世代の生徒と課題意識を共有できる。自校の課題研究の取組をメタに認識できる。
⑤海外研修・海外交流	海外の中高生・大学生との交流・課題研究のためのフィールドワークなど。 →特に海外生徒と課題研究を通じた交流が可能。また現地で体験的な研修・フィールドワークが可能。
⑥成果発表会への参加・開催	課題研究成果発表のための全国 SGH フォーラムをはじめとした合同発表会への参加。
⑦外部機関オトナタチ合同会社による研究支援	2018 年度下半期より、定期的に課題研究の時間内で講座を担当してもらい、事前の希望調査・審査を経て支援対象となった生徒のメンタリングを実施。「対話」と「問いかけ」によって、生徒が自分の課題意識を繰り返し見直し、課題設定に至ることに効果があることが分かっている。今年度はファイナリストの半数がこのプログラムによって支援を受けていた生徒であった。